

お爺さん三人の大連の旅(4)

寺西俊英

前号の8月14日(2018年)の続きである。旅順を後にして大連市の西部にある星海広場に向かった。まだ夕暮れには時間があつたのでお二人に有名な広場を是非見ていただこうと立ち寄った。以前にも書いたことがあるが、北京の天安門広場と一、二を争う広さである。この場所は以前、星海湾に面したゴミ処分場であつたが、大連人に人気があつた薄熙来市長が4年の歳月をかけ1997年に美しい広場に生まれ変わらせた。政争に敗れた形になつたが今でも彼の時代を懐かしんでいる人は多い。ここはちょうど一週間前まで第21回ビール祭り(中国国際啤酒節という)が行われていて、もう少し早く来ればお見せできたのに!と残念だが仕方がない。ビール祭りは青島市と共に有名である。青島市は1903年にドイツの投資家が故国の醸造技術を導入してビール製造を始めた、中国のビール発祥の地であるだけにビール祭りの歴史も大連市より長い。2012年に青島に行った時ビール祭りの会場まで足をのばしてみたが、その時が22回目であつたので今年は29回目のはずである。祭りには世界各国のビールが販売され、舞台が設置されて歌や踊りで大変にぎやかである。音響がうるさいし、私はビールは飲めないのであまり行きたいとは思わないが。

14日は夏休みの為か広場は家族連れも多く、皆思い思いに楽しんでいた。我々は、彫刻広場にある大連市の市制100年(1899年~1999年)の時、設置した記念モニュメントである銅板に彫った市民千人の足形を見ながら海岸まで歩いて行った。沖合には数年前までは無かつた星海湾大橋が威容を見せていた。全長が6~7キロあつて観光用に造られたと思うが、市内から旅順方面へのバイパスの役割も果たしている。夜景が素晴らしく今夜食事の後、通行することにした。ホテルには夕方5時過ぎに到着し、各自部屋で一休みして30分後にロビーに集合することとした。夕食はここから歩いて15分くらいの「柏威年ビル」5階にある北京ダックのお店に、娘さん一家と一緒に食べようと李さんがセットしてくれご馳走になつた。時間

になつたので李さんの案内でホテルから出てすぐの勝利広場の入口から階段を降りて行く。後ろにしっかりとついて行かなければ初めての人は迷子になりそうだ。勝利広場と言えば真ん中にロータリーのあるような広場を想像される方もあろうが、勝利広場という文字を見れば大連人は大連駅の近くを走る大通りの地下にあり、地下3階まである巨大で長い商店街のことを思う。ありとあらゆるお店が軒を連ね殆どのはここで間に合う。おまけに安いのでいつ行っても人、人、人である。長さはおそらく500メートル以上はあるのではないだろうか。前号で書いたもう一人の李さんの四川料理店は地下3階にある。

我々4人が着いてまもなく娘の陶さん一家が来た。李さんの姪と一緒にいる。8人の会食となつた。陶さんとご主人の李春晶さんは同じハルピンの北にある伊春市の同級生で、優しい方で何を言われてもニコニコして感じがいい。姪は中学1年生で夏休みの間李さん宅に泊っているがこの子も静かな子で、こちらから話しかけると恥ずかしそうに答える。この一族は皆控えめで周りの空気が読めて日本人のようである。名前は李さんの弟の子で李さんと言ひ、陶さんの1歳の娘の名も李思錦さんと李姓である。この子は我々3人で持ってきた6缶の日本製の粉ミルクですくすくと丈夫に育つことであろう。まもなく北京ダックを始めいろいろな料理が出てたちまちテーブルの上は料理の置き場の無いくらいになつた。和やかな雰囲気の中で美味しくいただいた。

夜8時近くになつたのでお開きにし、李さんの娘と子、姪の3人はタクシーで帰り、我々は李春晶さんのBMWで星海湾大橋に向かつた。完成してさほど時間がたっていないのでトンネルのある取り付け道路はとても綺麗だ。いつの間にか大橋の一部に入っている。制限速度は60キロで監視カメラがあるためか、どの車も法定速度を守りとても中国とは思えない。そのうち丁度対岸が昼間に行つた星海広場が見えるところに来た。春晶さんは速度をぐっと落としスマホの撮影をしやすくし

てくれる。橋の七色のネオンと対岸のイルミネーションは観光名所に十分値する。橋の終わりの所でUターンしてくれ、また光のページントを堪能することが出来た。この橋は上下2層になっていて風景も少し変化があった。対向車が来ないので安心して景色を眺めることができた。明日も李さんは大連市内を案内してくれるので、我々をホテルに送って二人は帰って行った。

8月15日を迎えた。4日目の朝である。今日は小雨が降ったり止んだりの生憎の天候である。李さんは9時少し前にお土産に蜂蜜の瓶を3瓶持って来た。私の部屋に行き帰国するまでこぼれないようにしたいと言うのでまた戻ると、それぞれサララップで口を覆いもう一度蓋を締めた。春晶さんの実家は養蜂家なのだ。花の咲く木の名前は忘れたが、貴重な蜂蜜だという。お二人にそれぞれ渡してホテルをスタートした。今日は春晶さんは、昨年からはじめたホテル経営で忙しいようで、李さんはハイヤーで来てくれた。まず大連の観光の定番ともいえる、海沿いの切り立った崖が印象的な「老虎灘」に向かった。この場所には巨大な石造りの虎が設置されているが、不思議なことに見る角度でその頭数が違うのだ。私は、以前8匹と聞いた記憶があるがお二人は6匹ではないかと言われ、そう言えばそのようにも思える。虎の伝説があってこの名前が付いたと言われているが、その昔この辺りに虎が出没したのであろうか？

ここでゆっくりしてもいいが、今日はこの度の旅行でお二人には最後の一日で明日は朝9時15分の飛行機で日本に戻られるため、一つでも多くの観光地をお見せしたいので老虎灘から近くの「棒槌島」に移動した。棒槌とは、以前の中国で河原などで洗濯する時、衣類をたたく木製の道具であるが、今でも地方に行くとこの洗濯風景に出くわすことがある。島の形が棒槌に似ていることからその名前が付いた。島名は朝鮮人参が由来だという説もあるが私は洗濯道具説を採用したい。棒槌島はこの辺りの海沿いのリゾート地を言うが、沖合に見える島も棒槌島という。このリゾート地には二つの石灯籠を大きくしたような厳めしい入場門があり一人20元を取られる。三方を森に囲まれた広大な面積を持つが警備はしやすく造られているようだ。別荘、ゴルフコース（9ホール）、テニ



人民日報の1面に掲載された棒槌島の海岸を歩く習近平と金正恩

スコートなどがあり中国要人の迎賓館である「棒槌島国賓館」がある。このホテルは、要人が来たときは一般客は締め出されるが、そうでないときは一般客も宿泊など利用できる。中華人民共和国が成立して10年後の1959年に完成し、当時は「東山ホテル」といい、周恩来や鄧小平も宿泊したという。昨年5月7～8日に、(つまり我々が行った3か月前)北朝鮮の金正恩が習近平と2度目の会談をした時に宿泊し、会談後浜辺を二人で歩いた写真が新聞各紙の一面に掲載され一気に棒槌島は有名になった。金正恩の祖父である金日成もこのホテルに泊まったことがあるようで、習近平は彼の為に配慮したのかもしれない。海岸の真ん中あたりに人の高さより大きな自然石に毛沢東が書いた「棒槌島」の文字が刻まれている。石の近くには新聞の一面の写真をタタミ1畳大に引き伸ばした写真がアルミの枠の中に納められ立てかけられていた。これまでに私は一度遊びに来たことがあるが静かな浜辺であった。この日は小雨にもかかわらず海岸は大勢の観光客に占められていた。

最終回の次号は、満州国時代に大きな役割を果たした満鉄の本社の様子から書き進めたい。

(続く)